續俳家奇人談

上中下 全冊

天保壬辰秋鐫

蓬廬青々山人著
八朶園寥松老人補校

續俳家奇人談

東京書肆
寛裕舎

[illegible]

[illegible]

得ル竹窓舌々一おのゝ[illegible]の士
あ十家の奇行を畫集めるものを其ゝ
僊仙山人の彩利[illegible]おゝ同日のあくる
時人の影を傷ル佛道奇人譚々名は
[illegible]の法名[illegible]
[illegible]士の事を彩其譚おのゝ一廉を[illegible]
[illegible]の趣を形[illegible]
[illegible]故あ[illegible]地屋[illegible]
[illegible]然[illegible]次道

[illegible]藏書

あんとせ雲ゝ人あふぐ僧俳ゝ山ゝ行
ふ筆ゝをおき一時ゝ俳ゝ諧ゝ俳ゝ歌ゝ
ゝ歌ゝ俳ゝ人ゝ行ゝ仏ゝ宋ゝ学ゝ
此ゝ道ゝ学ゝ指ゝ導ゝ書ゝ筆ゝ
上梓ゝ集ゝ踊ゝ余ゝ序ゝ
ゝの半ゝ世ゝ件ゝを諫ゝ
諧ゝ一ゝ冊ゝ
ゝ巻ゝ
ゝ巻ゝ

巻ゝ中ゝ白ゝ雄ゝ葉ゝ沙ゝの三ゝ譚ゝハ
ゝ人ゝ
ゝ話ゝ書ゝ
ゝ世ゝ
ゝ俳ゝ
ゝ世ゝ
ゝ三ゝ
ゝ世ゝ
ゝ力ゝ
ゝ載ゝ
ゝ二ゝ
ゝ世ゝ
ゝ倩ゝ
ゝ形ゝ

大年庵八朱

附言

一　道か古今の変ゆり俳諧も亦さうこそ世に初編ゆ
續きて古人若俳風者行を誓ぐ国のばん人由まこうみ
らび古今遡りて後今の俳るゆとかるべし温古知新乃
とくもかるとや

一　最編ゆ名ゆりて延引し先人の叙述に起天しく卒る
世ゆ行ふ友ゆ一田氏捨子の一稿を漏きり今ゆれを加ゆふ
ゆて大雅堂のゆ八逝世時人俳ふ載くりとくも今春生
ゆる老人佐玄蕉なる者の勅渡れるふ俳諧の風流をゆ知ら
ひくそ変の缺くるを補ふ

一　変ふ撰び集る所ハいたゆる古俳客の陸等雑記句集の新
又俳士ゆ俳諧その傳写の心しきハそ家くふ抜くゆ

記ばかりなるのみ　猶ほ古書を摸写せしめ考へを
加ふるを以て不文を顧みず人に示すのみ
をかりひらく

蓬庵閑人書〻志る

續俳家奇人談總目錄

上卷

一宗長法師　一肖柏法師
一未吉道節　一馬淵宗畔
一宮河松堅　一藤谷貞兼
一乾貞恕　一吟花堂晩山
一塙江林鴻　一岸本調和
一志村無倫　一大野秀和
一高井立志　一溝口竹亭

一高村和及　一四時堂其諺
一五井塘雨　一山本子英
一井阪春清　一田氏捨女　附盤桂禪師
一松倉嵐蘭　一岡村不卜

中卷

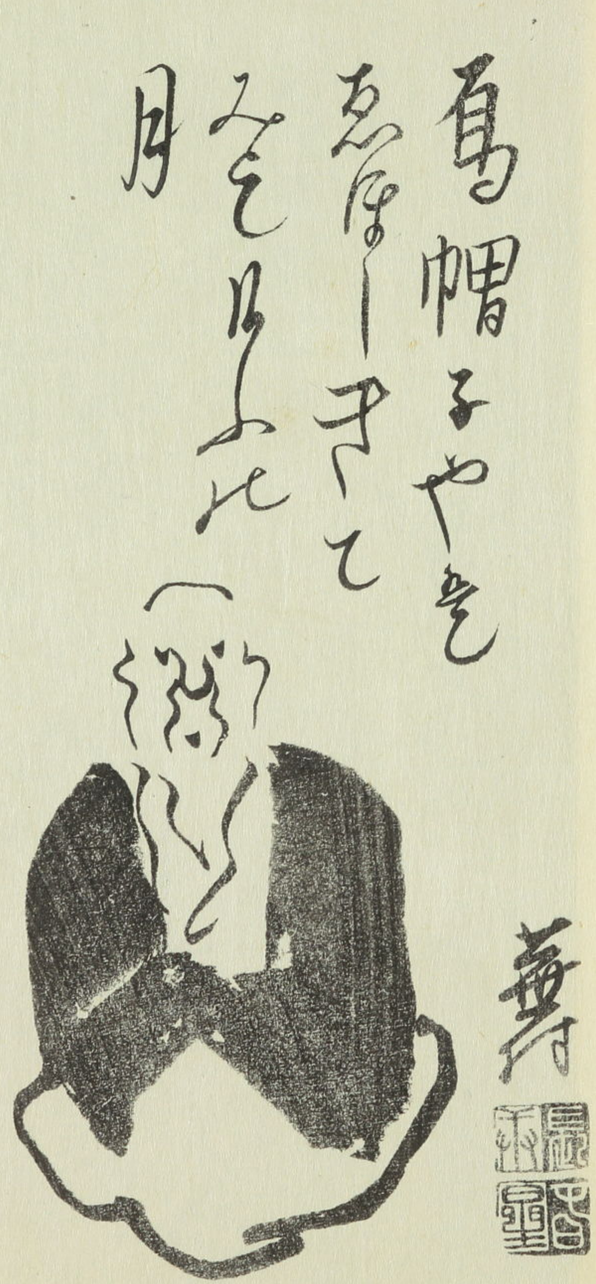
一宮司能順　一木因坊
一天野桃隣　附瀨尾桃翁　一逸人二川
一風士梅貞　一瀧方山
一小澤卜尺　一無腸處士
一竹下東順　一從者吼雲
一騷客凡兆　一雅人杜國
一山本荷兮　一宮崎荊口　附此筋　千川
一瞽翁木節　一僧李由
一磨工牧童　一瓢水居士
一白馬散人　一稻津祇空
一長谷部柳居　一大雅堂　附妻玉瀾
一泉石老人

下卷

一白井鳥酔　一山口黒路
一紫子春來　一慶紀逸
一俳宗祇德　一西島妻
一皐月平砂　一中村敲石
一越谷吾山　一龍門曉臺
一吾竹坊　一玄武坊
一谷口蕪村　一闌更居士
一渡邊岱青　一井上士朗
一川上不白　一寺町百菴
一馬場存義　一春秋庵白雄
一大島蓼太

通計六十有六談

三



其角

山村藏

嵐雪

立出てうしろ
あゆみや秋の
くれ

斤攻に脇や
ひもいて坊れ
ぬる

東花坊

詩六

欄干に出るや
菜の花の日影はしり

木枯乃地に
落さぬ
えだ少

去来

花さくら都は
門鳥

丈芝

はたは頃の
結めやんし
ん

野帆

越人

散時もたゞあるを
終に栗の花

北枝

伸をも
風に
あゆて
ゆく月

海山の島崎
たつる高欄小
松風

鳳凰都於東西雅他是壽

續佛家奇人談卷上

故勾當　竹内玄玄一遺編

宗長法師

宗長法師ハ駿河國潺田驛の産なり。今川義忠幼少にして死あるを悲しび、尤も勤仕せしむ。歌事愛ず年あり。或時宗祇ず渴し連歌奇のみを問るに一を聞く十を悟る。遂ず出家して名を改め、駿中小菴を結ぶ。十八にて免許を受け、捨院小庵かひ後ず業聖一休和尚に參禪するといふ。禁中御勅を受て新続波集をえらぶ。宗ず法師ハ連歌廿八句をつるとえいづれの時ぞあや訓御して伊勢國羅地義といふ所ず者歌庵ず乃立花營りこけ迯バ「立花乃かずせられて森ね歌うず

師殺しく後同遊打寄て天下花の本れ家匠たるべしと勅免
けるに思ひも寄ぬまと一向かゝ応合ぬ様なれ共奏聞を受
けるを不屈ゞ其跡うるべしと仰を下され名誉
なるかや或る時宗野大徳寺住理法豊おとゞく成られ
長も玉珠庵を建立するに山門いまゞ成られ寛に於て
其修理の費ゞ一を助んと已が秘蔵する宝家玉葉九源
氏物語を鬻ゞ八十貫文を寄附せしを延永正元年今
門家の被官秋葉安元その居を泉谷に移さしむ紫庵新
と自号し遂ゞ山谷に見るゞ西行の奥ゆかしなし
号「山樵おりふし色ふかし」る翌年幾ゞ世も去れと
英法ゞ竹を植ゞ「歳若紫は庵」祝免の筆れ竹をう
かゝ寄人の賞と仕ゞ附合ありしを冠法の句とハ成ゞ

大永の末れ年其竹を枝かきゞ今門君に奉るとて右の通
う八十七世の齢なれバ為や「おの枝ハ雅ゞハあゞ君と我
八十路の坂を去ゆるたけ」さ寄る一夢切を吹ゞ古潭る
ありを考ゞ古竹をとりてあそびゞ平生の楽みとハなし
ゞ時ゞ寛永年二月八十八歳ゞ拘友せる世僧
連歌の温奥を極ゞ去きゞ為えあるゞ中ゞ「ゆもたゆく
荒き海回を漕免ぐるもとい」ゞ「ゆを元あゞ拘法
ゞ教おりゞと附句しゞ拘ぞるゞ古今れ意ゞ大舟の
ゆくのたゆくとあり新改集ゞゆと元ゞ右げき涙
と云ゞれゞ法師去れゞ依て附るゞ和べゞゆとハ系の
阿加のゆとゞゞ清文字出べきゆゞ附録ゞ委しゞ伊逆バ古人を
聞知るゞの廣れハ来由なき云紫ハ見出げるとや

肖柏法師

肖柏法師ハ昊平親王の孫にして自然斎宗祇の和歌迷夢の道統をうけつぐ牡丹花と称ス時ハ心敬宗祇の両傳世に行なわれ毎会争論たゆるなくして文亀二年勅を受けて初めて新式今按を述しく其法をたゞむ連俳ハ後崇高に至りて花によりて其法をたゞ古今の変化ハ連俳ハ牡丹を初夏にいざなふを花鳥の変化ハ数時にしたがふ禁理法令十八条ハ発し出す「定て置くべき人数や幾世秋の月或年雪しての人ハ其前の白のくとをつゞめて肖柏ハ」

附録ハ老ハ番して接の池田にかくる其居戒

愛庵と名く庭中小四時の茅亭をうゑ其初ハ花しく乗花ともいへ酒を共に番を免ぐ花を者ハしむ古道と愛こゝ自の記あり後ゆ恵あり泉南ハ移る大永七年四月四日八十ハ業ハ死去り南嶺ハ小ハ先人のこゝ老人の遺書ハ秘事ハ法ハ伝たる者恵袋ハいへるを見るハ小巻末に四月廿日死ハ忌ハ牡丹花の名ハ伝かりて偽化ハ

末吉道節

末吉道節ハ津の国平野社人員ハ入て俳社の上ハ なる時「定ハ」のハ雪女ハ彼成親僧都の娘より雪女ハ替なり働きありふべしハ道ハ更よりおうハ物の反節ハ称ハ寛永の比江戸ハ来て

たびたび任れと不運すなく用ひられざりしの災ひ懼りて家祚を失ひ年の蓄ふせまりて義落ぶる時法元四年「宗義ハみのとしいまふあるとかこせしが絶なく不の上れるをハなるとう時ふ義意之年之

馬渕宗畔

馬渕宗畔初名重治京都にまれり人と成り正直なるを沙ふ法ふ法の忠誠之通時に一両之けるが貞徳ふ法ふえんく云く其うみ紹巴連歌の意料世四字を交うときけり沙も今より洗袖と称袖ふ称ふまくとしむ出て俗く紹巴も法と例を為て紹巴あを意る畔まと沙ふいふ圓法意料もくれぬとうと又一機因まりたまと沙浸逆て又機因とうれり巻の愚鈍京法ふとれしく知べし「深法けく花翌や移ふ桔梗四」「七賢が植けむ花ぞ数つもりき義意四年乃巻風呂ふ入く中風ふより逆て黄泉の客とハなりぬ

宮河松堅

宮河正由ハ道柄居士ニ称ふ京大佛堂の南先沙貞徳の四地ふ家ふ生ふ材墨庵の号あり後松堅と改名せり「義仲に育られて狩りくふ「洗濯の盥ハ用ひ物老の温雅なる孫ふ見るべし始免幼き時沙ふ習ふ沙ふ孫子白あり や答くいまく有る「ほのぐに咲く野新や垣のかい沙いぶるひくく学ふとふ法を後沙の世を稚ふるの時とし やう意く二十本漱之之て志さうびくこを送ふを伝習ふ素より和家をとよく添く法西に門人多しとふ巣老く疾臥沙ふ

のぞみ〳〵稀世の名をとむとなるに起あとあこがれ人をして料紙をとらしめげしめ外方まで筆を舐て舐て云〳〵「涼うと捨〳〵忽ち瞑ぐ時了享保十一年二月廿三日夜半」

藤谷貞兼

藤谷貞好ハ山城の人淡路守宮内卿と号し「貞兼」と改めうの句ら接翁と称し仰雲軒と号し「田植〳〵すや白ひと接し蓋の中「秋九日のいらく〳〵寒い」と如此人も中今漢ゞ門みすく貞の字を花に夜る人あれを殊る寒を接く今漢誘引し〳〵貞徳ハ見えしむ元禄十四年十月死し世を辞し句「月ハみこぼるらや二十市来迄」

乾貞恕

乾貞恕ハ紙の敦賀の人いづれ年あや江州大津ハ来り住てより貞室のつ庭まハ入れり「敦賀や深山あり紙さ蕨」ふ志一年ある人の「蕨くハゆるゞ今ハ蕨の蕨人とい〳〵ふ年「蕨ぼこふいきう立る馬の糞と附句し〳〵大津の宮乃くそといふ渾名紙を立るハ接を抱て笑ふ様ふ一説ハ室ゞつ子多し〳〵こいるも紙ゆゞるべき者ハ〳〵あの人〳〵花の雪をあるくしをいふ

吟花雪晩山

晩山ハ京洛の人逢雪ハ祖白昌陽父子に交りて〳〵尾ふ者ら〳〵俳諧ハ松堂より伝く吟花の二字をとりて堂号とせり「山ぶるまや十日の面れ降ぼけ」め「うきあとの酒く来るなり秋の悼」「赤〳〵人花の名さや庵ゞし」「彩紙や洛

世代の弓はおと山人雖は手柄の渉りしは俗世山を離れ
答くし顔物語といるはよく義助が野りと解きと時名ふ
しく志うえまく援あり元氏の紀列とも考へべし世代
去時の吟一覽して居や第八おくはせの蚊巻法め

堀江林鴻

堀江林鴻は俗称の門人こづうら風雲子と称し烟月老と号し
「ひるくと花のむうむかきうを「あうけくれいも」
水う子俗社家濃ふいふ鴻う集る所の京羽二重とんうふ其
北一時の俗家ふ子出を加くあれい称せう堀鴻のひと
り憤ること志し歌は永代記とあらはしく鴻を撰るその云
紫に宋的二代ふ輝る林鴻の鴻それとおのれふ比るふ色う
とおれも代子宋の林学士と慕ひ雲号をもかの鴻金門

ふ泊迷る詩ようえられば

岸本調和

岸本調和は石見の人居と安静ふ尚多びく蛮飄彩と号し
鴻くと出ともいふ寛永の比江戸呉服樹ふ来り住り「春九日
や達広大沼も尻りぐ」「新柳や伊勢男の蛮の捨あり」「蛮
あるとびで夜の猪うさん」「堀恵の二字やうぶとの茶巻と正徳
六年九月ある迷まで蚊といふ出を鍛り居」「あの一句庇徐判
なし本かくし蛮とはびくく時あらびくく死せう

志村無倫　附倫里　来川

志村無倫は越後國の人江戸ふ出く吟要の門裏ふあそふ拾紫彩
鴻くと雲雲とも歸に「ひくくせの仏彩やうしは蕪加る「色まれ
て水元のびる遠う多　或は野坡が句と伝来れ何是　享保二年二月死に辭世「伝は

雪月花 神鏡之
白生 清冷水 無倫
不知有 望月之
有明 二 脂 五

長 三・五

黃 一
蓮 一 鸚
重 一 金菊 一 贊
雪玉 三 銀梅 三
鑒藤 二 經葉 七

野梅
江南梅
東閣詩情

蘭蓋

壽千昊

雪月宴景彩

ばしよう水へゆきたるをめつ人見立倫里法とつき穂紫
軒と称し倫里死して其子来門跡立門水軒と号し家に
いろうて立流ふうり「花も穂も翠紫ようで恵めみち倫里
「るも鉢む傳ぐ一ゆうぐつぐ来門

大野秀和

大野秀和ハ江戸の人仙素を吹しく炭翁と号し「稲屋く
蹲うゆくしや窓の梅「ふとときに示けすや下和紫はしど光
何某侯ハ仕ふく豪雄の武夫くるが南時浪人しもむし
と云れし恵髪ゆく面力と常さうゑ次其南が或ときに
こう変を噛り笑へると算てたびハ憤り居るが打かう面
西塔上ゆく不図ゆき逢ふう和ハ云ふうふ海志ふくるの
あと申せしゆあられ奇怪く為ハ傳員をもと力れ使ふ

ものとうけふう角ふて作る変申しられハ海道振ハ思ふも
知ないで和手に孤敵人去るのふ文変ハ暫く作れふと稲
引あけく書話を腰ハ捷こいざ江系ゆれとひひ作く跡を
見ばしく延出しふう和ハあるれ作ふ無作免長過出ば
しく止ぬとなん一時の奇怪といふべし

高井立志

高井氏ハ江戸の人先祖より作る法度ハ仕へふ已家ふ
作ふ伝絶ばしく楊屋休南門人ふ家ハ客ふ考て俳紙を
あふ作ふく屋中ば或しく洛の立園江戸へ来作出る光ふし
成く立志といふそのあふ来江玄礼も俳ばつく遠千紙
宮を江ふうこうや松樂軒と号し和階堂ふ「稲尺ふ
四換ふふ小来花「浪永や嗤蘇ハ郭公「芦れ屋乃

石鼠脇ふくれは
移ふ子ども
哀

求めえて
ちる
ちる

黒柳子

萬屋得二
所蔵
縮圖

こゝ一ゆうこむ孤う多「我多ゝ人只ハあそ〻ぬ史緒う多寛永中に殺し氏僧け〻免系ふ拾び〻氏図れが「中〻ふふさうけを探れはとゝるて」「何ゆ名ま名義ふ公ゝとを附ふるが遂ふ一巻と成ゝ枝拾と新名きりをふ序て其名大而其體小者、立志法師と其ふ男なるも世年大名ゆを〻ふと知る〻

溝口竹亭

溝口竹亭ハ常矩の門人ふ〻ゝ老ふ和及竹箒等を友ゝはしおれ迷竹厨と携ゝて終日笠をの猜北ま拾ふ生〻ゝ吟〻歩〻ゝも添氏時ゝ〻句ゆ〻ぶるハ多「掛稠て尾鶯りふ多〻業細工「怪子に〻ま史多已が妙〻ゝ「ふの月鶯玉と きゝを拾ゝる「年忘れ沈き蔵〻ゝ沙りゝ元孫井に死ゝり蕉氏而俳神移多巻ゆ〻ゝ世ふ古多ゆる今人乃知る所〻

高村和及

高村和及ハ史風を志ゝひ常長を沈ゝ沙ゝ氏洛苑壬生村ふ歯楼〻霧吸庵亜唱法沙と自号氏「行わゞ多りをや山ま〻子紀「ゝゝゝと二日ふ多りぬ古孫を更「人蕉ふ尾の寄き秋の夕べう多哀の寄ゝ多「長き夜や来ぬ人て〻ふむ孫の数あ〻ゝ〻の松ふ「だいゝゝや寄みをれゝ〻二寄ふ〻〻乾凌冬〻不凋春再回青と〻ゝる年文を〻ゝ云ふ多せていゝ史ぐ〻たゝ元孫ゝ年ふ殺し孫世「我ゝゝも四十四ま花乃あけゝ知な

四時堂其流

そ猿ハ京洛ふかそびて云水の山類石等と時を同じくそつ
ふ交流四時雲と号し「芦田賀の永明みるを勢ひ」「出羽
のけ〳〵ハ猛獣の如く流るゝ山〳〵せ武の清く和ふきこう
勢ひふのゆて其黨をそるゝ山〳〵も読遍に郊ていこゆる
夏ゆ〳〵門人まぞうてまれを怒り清〳〵ふ涼めれし居然
そ〳〵元あけび其度量和ね蕉〳〵その庭広ゆえ〳〵び亜
こまれ滑稽雑説巻廿四四季の事実を為く其学和漢て
漂迷う古今俳諧季立れ出者〳〵いゆも世出の古み出ふ
若なそいうふそうげのれて知る人たきこと

五井塘雨

塘雨ハ京都の人号を五井ふ俳諧ハ蕉仙を師ふ俳諧
性振を好むの癖あり〳〵常に門戸を閉し遍く諸国
行脚紀と著して笈埃随筆十二巻と名く俳容れ日記ふの書
より六なるハ考〳〵史学ふ宏識こその記ふ温ふ美能
まぐ含ひ漂居せふ出ハ〳〵〳〵俗のあるを農民の事若と
ふ〳〵甚度を思ハ〳〵んや彼季伸うからうこかりひ出〳〵
「柱」より田〳〵の初いま稲の穂まこと云く社稷出初春ハ
芸より紀〳〵宝物紀れう「おとぎ」れりひもうけび表
唱ハ〳〵そ〳〵ふで初春きこつる蕉祭に秋郭公を「時雨
かこきく小雅の秋風ふ萩咲ぬ水や夢出こり〳〵きと和を
引く「ふ出細〳〵小萩ゞ寄の清〳〵ぎ」

山本子英

山本子英ハ勢州松阪の人加友ゞつるこいづ道の〳〵にうの
けん江戸へ下て浅草ろうふ住居を〳〵ゞ晩年業を初へ本

庵訳ふ移りて正徳中ふ死せり之聞えてる句「白魚れ戸田
れ[illegible]うや杜宇」あ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]堂守れぬる夫[illegible]よ
治源のふ白魚れ句奥の須賀河曙翁ガ一ノ本戸に入[illegible]何
なるゆふや英がいなみ[illegible]をたして入句[illegible]を後去迚我
怒涙と聞く翁うの[illegible]く屋ガて人を我を死るなるバ
を公のうらも茅紫れ法[illegible]く侘ぶべ[illegible]こ晒く涙ぎ魚今
翁ガ風雅を感じく出句を拾ふと丈曙翁去の句我喝へく
治源涙く其云を涙ぐ是曙風雅れ実とつふるゆめとや
いけむ

井陂春清

井陂春清ハりと江戸の娼家ふ生る既ふ己ガ業とすく醫我
変と成るハようけ迚ど幾程もなく涙常右衛門春清と名乗る

いう免[illegible]武芸をうぎりて兵術の師くと自称ス當く
立園ふ涙なりて頗る俳才あり「哀涙人や茅れ程と食む
嵐茸」汐に生ける人のふや花俳を吉田宝時ガ茅句無ガ
の時巻改ふ[illegible]ふ迚才之涙ぐくを[illegible]ふ後去く醫
涙ふ[illegible]ふ利髪して宮と云号と改め小八町堀ふ住く
翁ガ俳道とも投けし茅庶四年の秋祖庭町ふ邸宅
をうき井坂留雲翁と大ひなる標札を出し花英を呼し
て奴婢多く免[illegible]抱[illegible]く侘く時ガ医の上手なりと一時
世の人を誑く金銭かのれガ特落より涙悲を忘れく[illegible]
涙ふ[illegible]いひなし[illegible]ける友つひふハ汁ゆ[illegible]れく落[illegible]迚
[illegible]や老ふかよべる茅れ書ふ「あ[illegible]れ翁[illegible]ふ涙[illegible]や
老のゆざふど述懐せしガ程なく死去り

田氏捨女　附　盤珪禄師

捨子ハ丹波の國柏原田氏の女なり少ふより風流のきこえ
尤ゆ六歳九冬「雪の松二の字くれヤ苔の跡」されバ一年
庵ゆとなきはうこより「蔓菜にあらや捨おく家の玉」と
いつる孫たゆりし夏もゆりし婚め雪吟法師ふ後て和
家をもよくく俳諧ハ友ありて後松堂ふよるといふ「雑煮く
や千代の数かく花ごつか」「うき中ふ別く雪百九嫁菜うの
「日ぐしやはて重ても蔓ゆ蔓九積」
やみハ数なりぬ女房ハ家ハ嫁しく祝ゆ
なりく嬢とある夜ち髪けづりく妙融こいふ弟子ハ法
古律とりあひびしゆ老くく盤珪禄師の法つふ入れり志ふ
より菓庵と播州網干の里に結びく不徹菴と号ハ元禄十一
年八月その地ふ寂ハ歳六十八遍しく嶺雲貞閑禄尼と以ふ
田氏ふのもれる自孫子「秋風の吹来るかふ糸柳ふ孫
ぼそくゆ義孫ゆべうふ芭蕉髪の時の家なるべし後の人
孫世とありくる孫くハ死ふ
播磨の盤珪禄師ハ元禄年間の人ゆく其法嗣世ふうや
ゆう近化の後動せくふ迷て大法正眼玉泡と遍ハ志の泡仏道
修行の後ゆふりと句挽歌廿一首残孫ぜくふ今世ゆ和る
ゆ又俳句あり「叶ゆ来ゆ泡ゆ示ハうゆの孫と芭蕉道愛明
の一孫なるべし

松舎嵐蘭

松舎嵐蘭ハ板舎家の武吏一松君といさあく用ひら迷ゆ
遠ふ仕後ハ後しく後菓のおとうふ医る蕉門の風家ゆ「ハうく

と安くも立りつのるけ「去秋附面陳くはのる傘の笠「ふや法ん」ふれ母も故の合ん
あれ茅茨の秋より終ふ文字をうくる意見調成を為紹介
後年月のうめふ獄舎に拘び帰路病く殁せり蕉翁先ゞた
めふ墨絵作る其略よいちく金華を稽るうく敢て撓まざるハ
士の志と拙る文質備あるとりく君子の切とし風業ハ
義と骨すして実を腸ふ老荘と魂ふうけく風雅と肺肝
の中ふあそびしむ弟とちふむる十あまり九とせとけるが式
三年バうをおつる宮と猝して云老母と為ひ稚ふを法
ぶ〜と〜いまゞ世波ふ〜ぶよふされど元業辱の留く
居〜ひ云云ふ〜仲秋中の三日由井金沢の浪枕不覚紙
衾ふて獄舎に杖をひきをうくるさうち思く立ふな

しき廿七日の夜七十年九先達七業の稚子ふ思ひを残を
いまゞ悔むべき鈴ひの大十年ふ云云たゞ云る臨用
ばうを稚ふが手紙を書く弟が業庵に来て彼ふ名附をた
べひとしとふ五戒大業の眼ばけう伝ふ〜と戒九一字紙
はみく風戒とハ名く宅脱ぶふ色いま用のあうう紙去ら
ひ生る時むつまし〜らぬをぶたなくてぞ人ハと思ばるふ
侍し〜父の如く子のおとく子九如く思の如く事ひいひ
別迷むうひる俳の魅の杖ふ結ふ迷く枕も浸ぬだうう
く筆をとうく思ひとのべむと法ふ才法をなくいんを法る
ふ猶ふをがく唯ふ〜すぐきにかゝりて夕べの出ふむふ
のみ「秋風ま吹れく熟き業の秋

岡村不卜

是村不卜ハ未だ江の門人江戸江御ふしみ〻一柳軒と号し
「癪癒して癖いとハゞ世代の業」「物ゝ好く男ぶりの田
植かな」「是ハ国ふかち死れる迚も還暦元禄四年に死き
り此老ゝゞめ續れ系を慕ひ叙ふみとせむとせ先の向乃国
も俳諧の根を尋ゆとふ心あるゝし今漢れ系つゞきをう
記老ふ古ろゞれ古と筆紙あえせて武蔵野のふる紀友
ぶら彩の伝ゞに判ひせゝ人ともあぐひ先我も乗しむ
あゝハなりぬ云云その中ふ橋左持「橋ちる涼生の日ハ京迚
すゞ其角右「そぼ姫ゝ彩傘ひゝゝ屋ゝ古ゝふ不卜
素堂老人の判ふ左右ともに皆ゝし生田の麦平者を雨ら
ばと古ふ紙吟ゞて筆をひゝ「むくれゝ嫌掃左「伝ゝふみ
ゝあそびむ嫌拂ひ峯白右勝「嫌ゝゝ古ハ先ゞ紀仏ふ
不卜蕉翁判平面白滑稽の実を実ハゞ感ふ紀ゞゝゝ俳
れゞ先ゞゝ紀仏ゝひゝ白のいきひ彩まゝゝて寿え伝
迚ハ彩と古人会合の評ふゝひゝ文紀の風俗な
ゝ巻ゝ

續俳家奇人談巻上終

續俳家奇人談巻中

故勾當　竹内玄一遺編

宮司能順

能順は初加賀の文学と連歌に長じて世に猶歩く貞享乃帝元号年号を連ねし頃能きしむ涉歳のあまりを有に清砌とたまりる事時たくまつる句「けさ初るや筆に流るる嘉の水後る加賀大守の招きに意しく小松梅林院なる世紀沒免是に沒し元蕉門の御しく生居代討小雅読数判小なるぶるし連俳のたぐひめハかくもやとちるる不「秋風ハ芒打ちる夕べ哉」の二句を書く也以ハ迄ハはとにとれ俳名をまくまけぢめを知られしに翁も其物事に伏ハ迄けること元禄七年の冬翁の須白まく

命を頼に寿く〻恢いそく老よ死時く也の強客紙尺るよ
年六十七十に及ひく〻八旬も深く八業ひる変成ゲく〻古人さへ
極老れ低若八多く風流の劣りこほやうにぞおわゆる此道り
あ歩ふ若八年八十と限りこと有ひ べし我も羨く伯ると実
に尺よ堪能の人を凡丈の同徒也べきにあ〻と当時加たり
あ〻りこあむ

木因坊

木因八英流の国大垣れ人吟哭を沙こて風頭あり「早苗
みく命のながきこ心せり」「たなすゑ切るふ尺る八義より
妻ふ後れる人こ「なき新ハうつ〻ゲ亥紙鏡う分時て蕉翁
ある人の舎遊ふく「蒜れ浦ゲきに寄とあ尺てこ〻ふり
「寄れ初る花の後屋とよ初りけ尺こ附こ尺が当時英流乃
木因坊八低尺の物識なれバこて使りあるふ尺ゆせこ事を
奏く去ふ〻て問道ける此坊より蒜の難ふ寄るの居こ紙
塚め付こく「寄れ初る芝の後屋の紅ゆ尺ひ莉を伐る斧の
おこで寿ゆるとだりれ遊去こけれバ其和ふの茨出て
低尺こ〻こく低紙の茅の白附と同じ心を去こく発し機
物簡こく去ひ尺屋ひきと翁も感ぜられ〻

天野桃隣　附 洒尾桃翁

天野氏八伊賀上野の人蕉翁のつるこ壮業官を辞しく
江戸ふ来住し初名桃隣といひ後桃翁と改む右白堂又
呉竹軒とも号し「ふ桃や市もおちびの色」「六月雨のい
ろや淀河大和路」「尺くぐり拾ひあつめて薬ふ入ル」「初雪
や人八機嫌八紅の中」その調浅薄きく此人の風格く元禄の

紅葉亭　歌仙

武江芭蕉翁　太白堂

三吉平　方元押

清濁　長略

桃清汲テ

桃

乙因

呉仙

桃翁

ふるさと　笑已　茅月

ふるさと　蝶夢　何そる事の中絶

けり。矢沖菊江の清くまうづるとて、武人を使して義沢の駅に宿る。旅店の女房その数奇を聞かんと、二人の史を出家なるべしとおもひ、安産の符を乞ふ。蕉いとあやしくとて、符の一句を出て書しけるが、平産の祝ひあるべきたぐひに出でぬ。主人を九拝して、菊らふ何を出はらしけるや。蕉こたへて「こゝに出でゝ清くとゝみせよ。花は兄と菊は弟なれば、遊をなくる者と大いに賞義きこえしとき、或ひとの賓客を饗応ぶらく、武人も客なれば一日ふる水鉢を設け、射き手拭ひとうけ、客うつりて後打よりて掃除するを掛おきし手拭ひひろめ、元のごとく出いふとあれば、主人の許より礼文ありて、未に「うくるさま手拭盗むありさま

とハ遠えとりあれあること日の倫児ハあれこうこと

淋尾氏ハ江戸柳原のほとりにまえり初め秀和よ志さびて牡格とこゝ〳〵ゞ後桃蹊のつ中に入除泥殺しこゝ甚容貌

絶ぎ大絲舎桃菊と称ス「ひこ」ぢハ流のかゞれや梅のむ

「たくゆき松も移むるや表の面

逸人二川

二川ハ紙中冨山の庵ゆこゝ先祖より代〳〵を吉ものに住ふ此

人つゆふ江湖ゆ家を拾バせむゆ可をおりひ或時吉ものゝ形ひあ

ぐるふ許したまひびあつゝ加恐たまりゝくむそうに羈し

出るれ計ありと内て俄ま贅髮を判ぢ出ぢ書入れとなすり

その所を立去ゝて「来くれる人ゆハ逝ゝ花ま多ると我屋乃

陳子ふ出れ出せりを守ゆ墓ゆ逝て碧もあゝこを侍〳〵

稼稽つゝ主志を遂〳〵先らる依ゝ冨山ゆやうゆ一字

をむひび生涯を閑寂ふゝしるゝ

風士梅貞

梅貞ハ侍お居山の人いゝけ為きよう俳諧をものみ十七業

の業「山寺や只の横ぐ二三本蕉翁和四国行脚の後宮古ふて

此句をきゝ感ぐ感悦せゝれゝとゝ又「かゝませて水もこせ

ゝうゝ死つゝ為ゝと為ゝ涙ぞ〳〵ゞ厳ゝ若みゝゝ冥途ふおを

むゝ遠所侍家ふ一人の風士を失へうこをゝまれ

澁方山

澁氏ハ京都の人弱冠れ比ようゝ童教のつ年入る教殺して

後ハ似船子ゆ従ゝ拾ぶはゞ先異山侍ゝ茅山後ふ方山ゆゝ

改む招婚彩ゝ号ス「反橋やまゝ敬むゝうあきゝ西一せ免ん

く魚の骨うるはしくぞ生ず魂隠者を訪ひて「祭ごとれ
にうまき花や香樒子紙先立ける人に」「はぞ泪鰻頭ふて
を勤みても生ずれば六尺四寸痩く老るの一日に数十里
海と蟹のなげき尺餘うくゑ死の夢れおとく敷やおぞり
く神人と称せり

小沢卜尺

小沢氏は江戸小舟町の人吟哭よりをくを交く孤吟こいに
も何迷の年うや蕉翁を我庵に迎へうまれと後乃
海こ学ぶ一日海が名紙投んるをあふ迎ヲト尺と名けら
係られ小沢の苗字紙省略をられるいとおりろ〜を俳
句多きが中に「秋れ雲は富士紙いろ〜か嫩とろう

無腸處士

無腸處士は医を業とする雅波ふをやりを人ことあり
名利ようとく當世はたぐ〜も自らいふ外剛みて内柔なる
あれ我性と固く交が無腸号をあらいふ俳社は宗因の
流を汲こいへども又蕉翁の風をおふ一ち世宗因を出く因
墨に歯接ひるとて「月が抜ふ己が世はあり〜〜〜磐その磐
落うくれおとこ深く庵にこの玉ぶりる脱ヲ古紙出ども紙
探り見ぶといふおと為〜霧よる俳士の会稽なる連歌の抄
物はこを接ち〜柱に膠〜舟が刻めるの猶きをうれひて
也哉抄をあらは〜手が壹波の梗槩を出うに其撤を因う
ひる者は窺はずんばあるべうしび実に後代の惡過なるうを

竹下東順

竹下東順は江州の人甚南う父と若うをしう医術をやる

ひさの産こせしが程なく太田侯より俸禄を給て妻子とやしなふ漸く老ふ窮んとしたる比官路をいとひて市居ふ暮らし俳をとゝのしんで机とさゝげ筆紙はなるゝばるあと十年あまりそれは吟懶かみそもとうや「白魚や漢菊が蓋ふハあひなぐら」「年寄も降ぎれぬるのや年の蕎蕉翁評」云く此人江の隅田ふ生れて武の江戸ふ移てこゝふ名ならび大隅ハ松市の人なるべしと

淺者吼雲

元禄丁巳卯のとし秋の夾ハ水上の月をむと番子の渕翁と伴ふ免て浅田河ふ泉ぶし清光ふ伴とさゝく各句俳を窺ひるに仙花が淺者宮田家といふるの軸れるふ湯あるゝ免なゝどしゝるるが如と云にうゝびしまれ一編成吐く

「名月ハ沙ふ名うるゝ小泉うる翁をはじ免法人の目うんで且はぢて句俳をバ止めうゝそれより淺ハ吼雲と渾名して宮田家と呼ばるけるとく著し俊綱松尾の江鍛うるく水上月とゝ入る歌出うゝし時田舎より使ふ来う居し書信の一巻ふ寄うまつゝんとて「水や竜そゝゝや水ともんえうゝび かゝうひて伴免る秋の夜の月とき与えしで日紙同ふ伴るの侯なりゝ家」

驗容元兆

元兆ハ加州金沢の人和ふ出て医を業とし壮業より蕉翁ふ就て淡猿蓑の撰ふ加りる比竜の俳陽ものづゝ雅情あり「骨茶の刈れあゝも本茅うる」「市中ハ物の白仏や夜の月」「上ゆゝとゝ来る雲や秋の空」「志ぐゝや墓本つむ家のまと

あう何れの所なりや罪ある人とて俗ごりの己もたふ獄にはあが
るは多年中ばくての今「猫の子れ強さよ花のまるまる
「かげろふのみるも許さぬ風うれきく人間と流さびとつふ
あとかし形く対れあう高く縄縛の者を免るる所迄
どを出世とあさ俗ともや思ひろむ果八亡命しく終る所
とし〻沒

餞屋杜國

餞屋平右衛門尾張の人杜國と俳名し茅菊丸と称し貞享
六年の春江戸翁に随伴し名古屋山に出る名所山入て宇吉
の家にて二俳の会あり帰りて後何変りや罪あり流死
刑に行るべきに極所を以て「蓬莱や内玉のかぐや桧山と
今せ」と国主中し免て古歳のあり罪一等を減して国主

伊良古島に流なる歳暮も有て流るされい書る
が此人を惜る句れ「去ふ伊良虞の杜国例ちゝび笑るは」
鶴人より申しあしけるを「翁もむつまじく寄むとろ
足附くうれしたづる寄れるむうを思ひて一羽ぬけ
寄嘶喜ばりそいらと情

山本荷兮

山本荷兮八尾張名古屋桑名町より住り檀木堂と號し蕉門
の名士年中行変供屠蘇白散「いもけ多や屠蘇なれ初
る人沈水素日祭「こし毎る香の花のつゞみるる石清水
臨時祭「皆おもも志づふかゞ橘ふ灌佛「けふれるや沈
を小洗ふ仏ふ端午「面痩く菖蒲ふる髮うし〻施米
「打あけく施し米を出くふ紀元明薬「若菜より七夕素ぞ

おほんよきこ駒迎「法免髪も袴の姿や弱むく撰歩」「墨の
紫や昆のとれくる蜜十月更衣「五衣の衣ぐくもし帰るも
五節「ゆひ姫か髪くび横櫛ふくり追灘「かくれてや抱て
ちづくる鬼の面大ひか其俤多紙丸る拙に映事河蓊の勤
氣と蒙もしい橋ちとつふ出と俤迄るようかられやいとひを
しきりのちくしかや

宮崎前口　附此筋千門

宮崎氏ハ濃州大垣の人交仕くく俤宿を東字ちひ後ふ前に
こひくを蓋門の玄成く「畔ねりや義ふり沈く流迄河「鳴乃
よや蛍も仮の足底ふ先「庭ふの庭ふつくしや初嵐むとを
蛍扇の絵ふ詰あり家ハを俤世あり考くハ祖女が似を蓊法ら
ひ出迄こを古ふの行ぬきなれ中まも去る形ふ法更る法河の月
に扇ふ行くくと云くうけを法ハ考くく注ハ考くく上法下法
ハ月の紙ふいれぬ合点も迷惑くいま蓊流のを底ハをそば
の実り嫁いうなる人も一串ハ法梅よくく賛くていをく
「味噌つけくあづくれいよきを蛍扇うふ実子此筋千門
風流あり紙世の墓まくく「よくくや君才法くちもちる搖
此筋「燒火ふハ基本ふ北炭とおそきけ千門

誓菊本節

本節ハ江州大津歌ふ作先りを「うを世くよう蓋菊の門
程よくく誓菊と号ス「花さくもむづくくげなる老本ふ
「名月やよひハ女の変ばりう「輝ハ年ふかくせつ冬おりを
其卓見おりふべくく芭蕉反古文ふ本節十月十日栗ハの病床筍菜濁を
り俤法子打寄り食りをとく免けを梨実とのく好く猪ふ

節うゝ〳〵制しけるとゝ記せるを友盈むこと絶えび
ゝ迷ひて進む一片味ひて底ゆ浮ぶ節いとく胃うくる而
あし〳〵死ぬるに記ありこれ是菊の病床を伺りて深切化
人ゝ考えるるを伺さ知べし

僧李由

李由字買年俳諧に任じ釈名して亮陽上人といふ近江の
膳田に住職し庭に田根の梅を植え考る業をとりてこれを
とし友に田梅庵の号あり蕉つゝ拾びて許六支考等と友し
若し殺白伺さ無せり「梅や病れおさまる世代の春」とする
ものこと年みその名おうるに惜むべ先菊の風流を考ふ
とゝども三昧絶行の形うゝ考れば乞ものこびも考るを〆ゝ師
の法を伝るけるゝ法用とゝ〳〵ひふゝ〳〵猿立して菊の庵と称迷
しようゝ伺者のちぎり深きゆみよの仏を伝ふる如しあも
ゝく菊の幻住菴に客若の打を幸ひ考りに三時の切をつゝ
て俳句を耕し終に其住境に入しゝ菊栗津に病る比も
法の伺れ年号を物ゝるゝて生隙絶るあびゝに吟えし宝
永二年に寂し年四十八

磨工牧童

牧童は加州金沢の人俳力の業をゝく考るのたつきとはせり
才に校と蕉つに拾びてそに其境に入る「故はゝられきは
伺のゝとみうの月」「秋蕉を伺うし考しゝ業書に支考
あれが為に偽して云く牧童は彼が兄にしゝく北枝は氏が才也
素より謝公が才能と爭は伺は嘗ゝ洗家の冨貴とも考ま
び略むゝは梅菊の風流をゝひけるも中比蕉つに入て時の

雅ふかそびるんなすびかたくバ一ッ巣に生ぬる者乃
彼ハ梅のもの清きに物りおれハ郊の色の曇れるふよる略吟
席交舎去れ人を志ばとりふまとなし時ハ居眠り秋ふく
生涯の記拙こせり略歩ハもれとなる色〜言ぬもれを
浮〜たまひ終年嵬卒の内院ふ称むらんとで言ぶうる
紙菊翁うり武法師ふむひて牧童ハよ紀考と申さ逆
〜せよくて恵うんやあ〜くてようう〜ぎや主翁ふら
でハ志〜ぶか〜物〜ハ生てハ先ふるべくも俗俳ハ後なら
んといるむ〜れ人のを二人のものふ俗てや行〜ん牧童考る
ゆいを我そのうみ翁ゆ海〜時武の素子雲が「浮蕪
岩紫去の蓮風情ぶぎた〜むといふ白れ物〜に及ぶ芭ハ
去のれんと音にく唱たんぐんがよ〜とをくられ〜おハ伊ごとも
芭ぶえ物〜ぶと時の人れを浮〜けふ人ハ人のなるひあり
てけ〜ぬ涼ぐもたどう〜るゆくにいふらん彩あ〜れまるある人ハ
世ふ芭〜こ伝れハ老の俗志ちえ〜〜むを人ハ紀童の留に物て
風雅も俗〜危う〜ぶとうふべ〜

瓢水居士

播陽の瓢水ハ人に志〜れ〜冨家ものれども俗ゆふ金銭を擲
く後ぶ〜〜ふ〜も色にうけぬ大丈夫く冨妻欲或〜
の元旦ま「かつちくと抓出れ外ハ去金の物」「流るゆ我抱
義ハあ〜〜ふ」「妙みぬ〜ぶ冨ま〜て言や〜ふの秋ふ外調る
志と志ふべ〜平生志〜〜き人の雅波の花女を招引せん〜
云るをいふ先〜「ふ〜ふる家ふ〜ゆ聖にかけ蓮花菓或
人ふ達磨の賛志ちれ〜「釈ふ迷ハ花も紫も色ふ山れいを

こゝ老て俳諧の名をもとゝ学ぶ江西呂丘逝る時「けし
炭も柚味噌にはきゝく猫のこゑ」なみ〳〵の俳人ゆハあら
ざりしに「初ハれの雪が降るゝ時雨」（湯坂集ゆハ藻風と号す宗審
瓢水初名藻風と云ふ不知）
の句ハかの左大臣どの〻古ぶようゑ玉砂〻或ひハ初句
一句をとゞめて蕉翁とし〻其南とあひハ知ぬ者のいつもうゝ
宗田ゆふゆづりて多くハ名るさゝず

白馬散人

ゆゑ〻ハ播州加古の人俳諧ハ蕉風をぬく上をとゞ明る元禄
「篠掩の古くゝやるはこうる古今変化人いまゞ云ふる所と
称ひべし〻「隠れ家ハすぎゝく牧老のふりうる「初鶯やはゝ目
をあらせれ水ぐしらく「日れ糸をはらしてハ平ひ時雨うる一切
衆生悉皆成仏のもゝうを「盥人の殘おく雲の屋どうゆいづれ

の事ゝやゝ初のうゝへ出たる比殿上人の詠ゆれ遥ゆ陸ゆうれ
ゝ変句せよとゆゆ〻に「萩萩の中ゆ出ぐうゝ接よゝれ或
ゝ紀徳ゆ夜泊の詠れゆをとゞ生れゝく「篠掩ゆ余ゆれ篠
きく霜夜うゝと其俳情をゆ先ゝる彼麦林ゆ数摩ゆ乃詠
の句ゆ「冥冥ゆ雪れも淋しひゆ孤ゆ初ゝ孤ゆ遥ゆ
優劣ゆあゝべきやゆ人ゆ冥ゆ時冥ゆ加しも老ての後を
頼る冥ゆけゝめゆゝれゆ孤ゆ抜ゆゝる比妻死ゝても先ゆ出ゆ
ゝけるゆ孤ゆ見るゆ就ゆ出ゆゝと俳諧ハをゝ比べて出数
の二道とゆ冥ゆをゝるゆゝ屋ゝ人と成ゝ比蕉ゝ歩ゝる数十
金と出ゝゝ田舎をゆひて與ゝゝゝゆ色ゆゝ冥の暮乃
狂冥ゆ「老をゆゝくれゝる狂子の大振いゝ遥ゆ老ゆあゝ
ゝもゝべきと隠若る似ゆゆぬ遠懐と遠時俳ゝゝゝゆゝを

の縁りなるよし後るゝ人の知らんこと

稲津祇空

稲津氏八越後の人にて矢部入道時八青流と俳名きこゆ
しゆう家出ふ既り又俳文をもたし矢り多老てしゆう諸國
を種歴ふるの志いでゝ江ゞ豆州早雲寺あるゝ家祇法
師の墓前ゝ拜く髮おし切てへ名しく出れより祇空と改む
その時の俳ふ七顛八倒五十二翁蓬頭薙郤明月清風と又ゆくふ
「我加ぎゆもうみ加つきゝ石の上」蓋ふ東奥羽越の名ふ行脚しかゝ
ゆゝく江戸ゝいで暫く深川ゝ住居ふ掲屋の口號「森ぬくまる
留にぶそつく紙子加ふ掲屋」て「梅ちうゆ多紙
ひく紙の名ひも法」女達磨の画賛を好まれてそりゝんゝ
ぶんがゝ稽出しゝく「九年何若男十年ぶふ出ふ妙法寺内

大工孫兵衛ふ出れと少ゝく禄ふ多ゝ「りゝく深く貴
嘆せゝれしゝゝ後洛北栄聖ふ住ふ越ハ散雨（江戸千ゆ釈ま
泥洗）と云ふ世平栄聖の義面ゝ「るハ芭ゝ晩年浪華より
江戸ゝ帰りむゝの途中箱根湯本の里ふ行ゝ殺人事保一
八年江月ゝ遊俳に舉手動足平生神通鉄牛破裂音信不通
世を捨ふの狂ふ「去れ世をバ好ゝりくゝまと死ねるなり
地獄法ふゝの極一歩ゝ助その門人稱を祇法師の墓面ゝ
たゝゝ玉笛山人と題号ふ又臺を深川八幡社内ふ住ふる
とゝふ門葉多ゝゝ中に江戸ゝて日時叡と称ふる流ふ平
長ぜゝいゝ出る祇徳祇ハ衣邦空隨鳥賢ゝ

長谷部柳居

長谷部柳居八江戸の人ゝ屋ゝ宦途を避て閑寂ふゝゝ老ふ

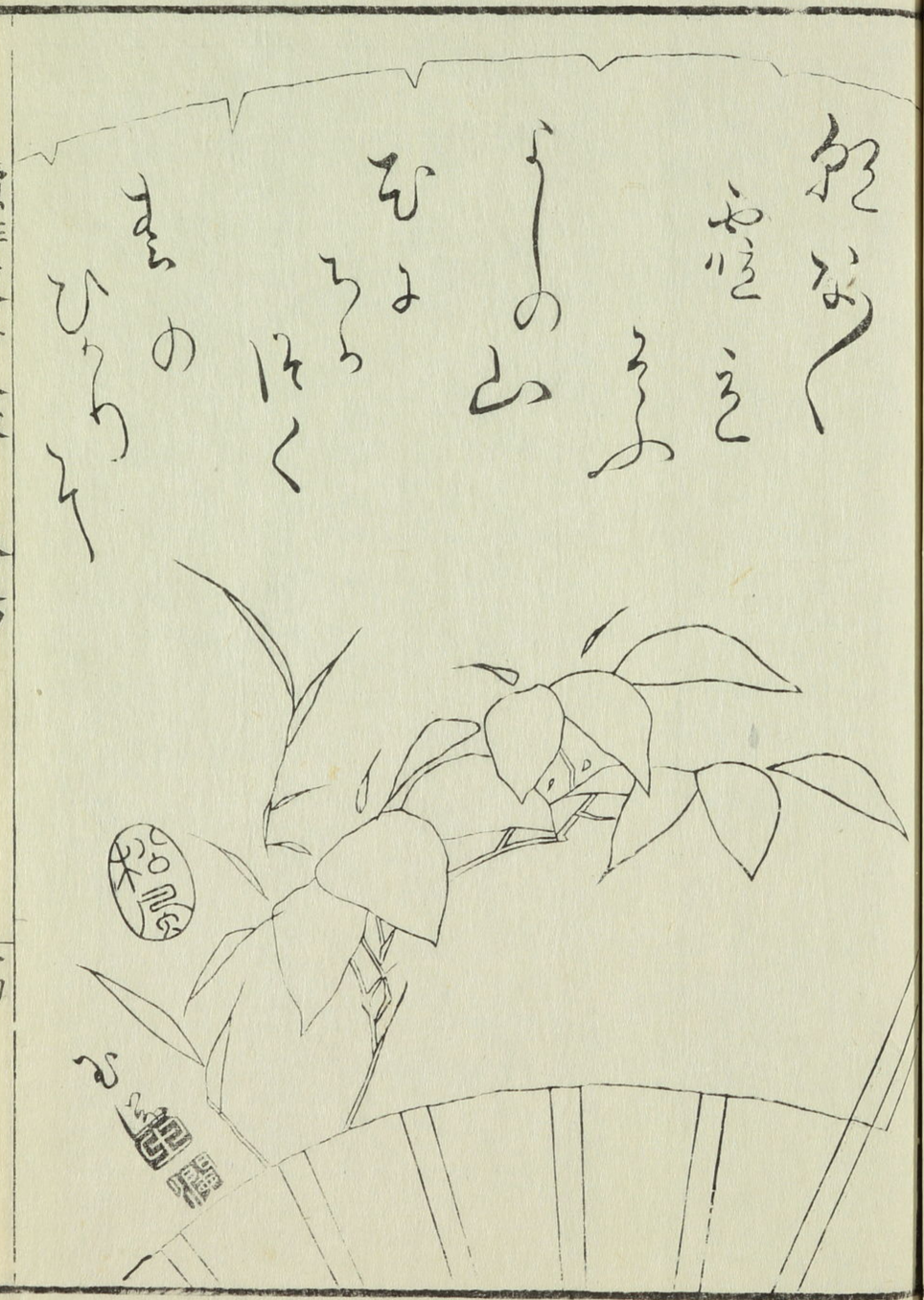
向ふのまろやひ泥社の孫麿をはく蓋を蓋く蓋箱の風凧は
坂のかる「書柳や二筋みはぢ壱本より」「茨子畑や我物
あぐのら思ひ足」「滝しぶの横笛いはもし冥途者をとせ
その屋の陰炭小隠んをそれひ馬光翁の人と細しく
乗び蓋風小帰き光んとは蓋と人色墨と号はを他ぐ
ひ木判者こ放て巴吟の有紙人袖を有ひ各自小金玉の光り
あうく一時世人を警嘆せしむ或時江戸れ名所を往免ぐる
とて瓶井戸まく「反橋のはれ小百小茶
帰うく「茶の花やはるの屋ハ目のくはり田畑まて「粕び
よしまく俗よしれよ」「花三回りあく「苗代小案山子と
祝ひ守ひ神又を五へ藤せし」「壱の中を表ひ」「壱て故
屋の中あとを事おとに沙御の藤あり」も晩事病うら過て

病中の吐のを多うり枕中にまりり居ぐうハ延享丑ひとしの
書まを有ぐるあり坊祝にうひよせ猿の日記うひく猫居の家を
乗まむと筆紙指くいまく花の蕾りハ僅ま七日ばりを祝
しも三間のあとせあく日記しくんむと略十二月ひのうり
あく時くいとより「芒香しひあけしくり松うひ十四日
はるく十ツ時ようり風いる「花ひんや蒲堂のうくも業丑十六
日松ひ見ある屋ようく後風あるし八ツ時過まを面隆いひ
「けふまを表の山居や花を表十六日夜来風面変志小
ぐうく暁より殊更はれうう「懐もその羽衣かして花一本
十七日はるく夕方より風かしいひ「ひとり茅ふんうぬ
や庭の蕾十八日はるく「面ま来く浸猫地ひひし屍倶沙
十九日松ようく四方ようはれハツはさより風ひひし「ちる

花をあらく弾きそ松の夢日ぬ橘のかをり浮世小路ふ松霧
庵をいとあるてうみ山ゝ嵯峨ゝえざるも見こみ老が法名ら
ぶや

大雅堂　附妻玉蘭

池野秋平名八喜名字八貸成京師の人画名古今とおりふ大雅こ
号し九霞山樵ともいふ東蒲子ふ云く大雅堂八名我也ふ
きぬ去く新命の表の篆也ま「いくばくやとゝは逝て尾まあ
けれ表芳ぬ子拓学の況」菖粉ぬ子況ふ子ま花れ忘げく
かかをつなゝねバ新る人ゝれくと妻玉蘭八蘇山氏ハ如画とはく
和家とおの先ゝ者小美しゝれも矢操ゝくゝよく文ふ估ふ
ゝれハ文婦衣とたゞひゝく恵むおとゝ或と紀文海さゝな
と求め来ゝく芸ふゝゝひ妻裸ゝふゝく琴を弾ぬるとゝふ



大典禅師その墓誌ふ玉瀾配夫行と出れども完全なる張義と
やいふべし

泉石老人

泉石ハ浪速の人なり好ごく能ゝ「つゐきけばきくこと庭ハ
掃ごらけ」「雲ふ手雲田角こ花れ月」「奢られて又ひらく
紙ゴうる暁手元食とえんく」「初夏ハねとあのもむく
家ひとく性つゐふ酒をたしみく拘ふ物るゐ色或時酒ゴふ
と猪出しく」「級翁のひとかくむ方のむうまとはやるる
哉茅亭先生惜物多城すく出法るも達せられしあと
その比初ごる若なりしとうゆ俳社ハ又その緒餘なる

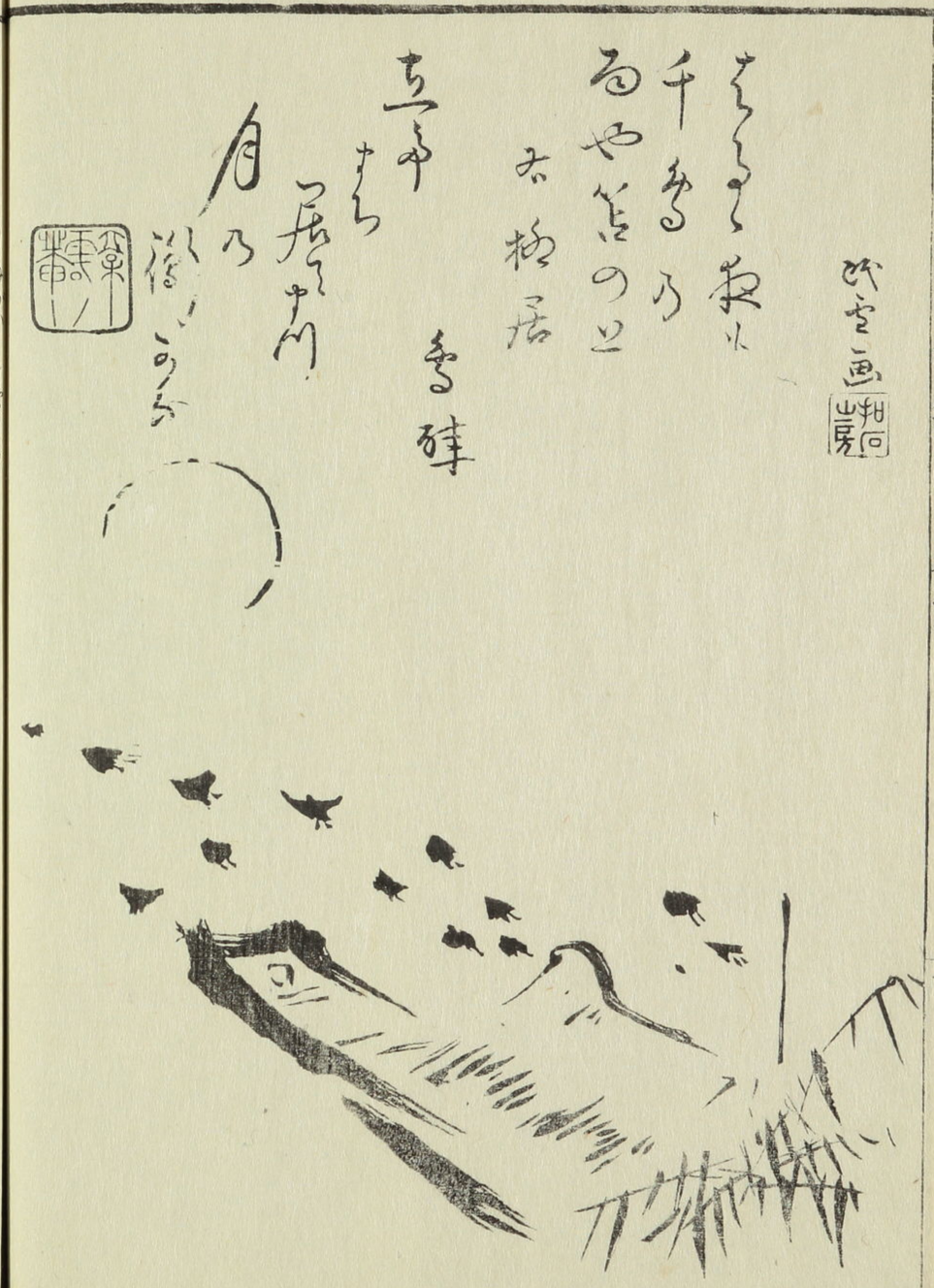
續俳家奇人談巻中終

續俳家奇人談巻下

故白雀當　竹内玄玄一　遺編

白井鳥酔

白井鳥酔ハ上総国地生れ邑れ人をいふ並びる紀豪
家なれども人れいく先ゴよりて金山手巨萬の財を費し
やいなきゆに思ふ物うら仕業ゴ家督をゆづり世俗俳
社ふ通る都居を泊ちく客をもる殊こいひ豪粗こ号れ松家
菴二世の宗匠く「先ぞ氏ふ寡もゆやうり稱ゴし「ゆふぐち
ふ思ひ切ゴる野中うる「玉柳やふ髮を拾ふ猪の」「一ツ家れ竹
と中ゴく時面哉ゴるく」俳ゴ見れいそゴ紀ゴ中ふ三日月切
ゴく孫舎く猿ゴるくいふ人ふ庵ゴるら世出ゴるゴ十結月俗
紀るといども家ゴれゴいふ人を出ゴく捜しのとめ



去むるふ品川の娼家なる客屋と客のれる物主客ともに七日居續けしとき〻たゞちかめ〻浮出し意利ありとまたとたゞなく伝ふひ〻帰尾張さそつ人去時爲に笠打よういふ公の暫くせられし日光の光賞る似合ひと世界間々るに我のと拙墨にゆける八幡ひとしとも不訳をもる村公にいふうり無る乗ゞさ居つゞけしうり拙るふ無尽くるる打うち去伝るを幸ひ帰り来れまと平元うて答くるもをう

山口素路

山口宗欲江戸の人素路号人といひ次麿屋と号伝者ゝ酒巻ふ居一瓢とりて号れまとし伝古俳を通しく云く禍莫大於不知足福莫大於知足と若りしよう第りをめゞ一流の宗匠ゞ

ゞこいふ又双六の妙手ゞ者に人まむひて双六の猪負ゞ

いづれの手ようせバおそく出けんと打笑ひ〜かるく〜ひ猿ん
打べうびとをくしを寄くといふべし〜或う〜猿丸ひ
た緑町なる庵のけらふ「我いたゞく琴ハ心とのびるれ学
と其琴を弾く〜楽ことせ〜ぞ又素藝なる俳諧ハ伯父素堂
子にまるびゆく〜風流に既る所の殺せ〜時「猿曳ふは多迷く
猿の数寄うふこ吟せ〜もあるれく〜老八十二翁に〜世我
去るふつ人猪戸が逝悼集れ中ふ色〜宝暦の季夏晦日乃
夜未明歌よ拾びて「故ふ二人合れて交をこ〜みう「のそ出し
茄も茄子ゆけゆく〜と附すもも今ハむうと抜うふご記
〜〜又生ふ支どられ白どりとあげう「数入や積るもひ
とねえん種釈当吟「柿よ六ッ藝尽〜あり十三夜治徳「再
捨に考稼がなる花卯木白雲「山寺の優既出てる暮うる

雑琳「高足れ夜ひ出〜泊て時ふ百里「松高や揚名の仏
風うる敬雨「ゆひられて松の高き〜あつさ水花「寄れ
変ハ大きるこう梅の花祇徳「梅咲や三所ちなで〜む〜物
治洲「花に杖ひく〜果〜ふも撓むまで素来「月雪ち
での事よ花ざうう紀逸「麻れねのくうぬのハまざあと
乙由「花ひくを引出むられ月見うる宗瑞「虫干や貴ふ時長
ふ多う合る光「猿の北大狗出ひをどりふ焼方「けいこうや
日ハ焼けを捨〜ゆく柳居「何虫の面新ふもむ拾ひうふ
米仲「大和路の雑をちひひや花ざうう浦〜「彩月や海成
ちふる〜一京琴風「豆ほどふ横くも廣〜竜荘京義
「咲さる〜夜とふ孤ふう虫の大名治涼「甚云湯も月の数〜
元ハ〜そ貞佐「熊坂が出刀ぬぐる新夜うる老蘭「紙雛成

男が立ち去りたるを和波「かゝるひけり猫も八十八夜を」「茶合の
義右衛門が裏の花世うの山二句作者おもゝえび杉〳〵湖の云ひし
てハをうしかれ〳〵花〳〵たる時年ゆうてれ名家多うるも
ほゝと笠なるうれ

紫子春来

紫子春来ハ江戸の人六盤仙と号し「正月が来さう畑より下駄
の江田家は元日入るがおもし」「名月や花なき里ゝ夕比丘尼
ゝれ古今れ春うしを立て立ち入ると大ようなて秋の正花にし
なしるぞ働きなる自らの小今花の一字を三春ゝうみて
漫りに正花とはるハいと無なしとまゝ格別の云紫ゝびや
米仲ゝ紀年いふ春来住のふ壹服女の作成掛物ゝてえけ
るが或時賛しゝ「我意ハ釈迦や達磨と仲入うて其ゆうれ

ふ釜ゝもがるゝ又ひと日我庵に来て花入よと出しゝる河出
に花ゝ田金ふ住ゝ入ゝ山風ゝ吹ゝ秋ゝ花ゝ伏
ゝるがいつの間ふ花ふ袖ふ入ゝ蓑ゝ雨に濡やゝむ
紀よゝと春ゝふ呼ひれるが不圍めけ先ゝふ拘つれあ入
てゝ和ゝめけどゝゝに出ハなゝ発角ゝゝ宮あきけゝ
ゝる元おりひやゝゝ「月ハいつの煙もれが出ゝゝあゝへし
よたゝゝの仲ゝゝと其酒落ゝゝ

慶紀逸

愛紀逸ハ江戸の人通称宮内と稱ゝ四時
菴の号ゆゝ「清俳ふ好奥も出ゝ二紫ゝる洛の宋屋古稀の
賀に「汁上ハ足ゝも易ゝ百子ゝ「時ハ色加ゝ菜れ猴む
ゝ歎情の面ふ賛ゝれゝ「蛍はゝゝいひ猶ゝゝる拍ゝる

宋之問が年く歳く花相似歳く年く人不同などいふ句は感じく紙舟の変易を思ひ絵ものうらうらと形体を添じく業花集武玉川十六編と書して人の笑ひを求む猿小太郎買明当るから見とかりひ絵ぐ今江戸紙舟と称するハ志の人を招く其擅場こひたれば一時流行しく紙をえて逆はハ又ちろ〳〵賣し紙るに盈れを虧るれ易紙を乏えるるやまづしきるはあるうたる新元あるしとかや時は秘書監風谷先生その風流を称んるの句あり稜く逸氣好風流閑座清吟能解憂水雲月嶺幽栖意四時常作菴中遊とまく客養ものやしく日発句とかるるうるいふ「花のあ

俳宗紙舟

紙舟ハ江戸の人紙空にまるびて自然菴と号し人事に俳諧ふ癖

一夜更その日れ来るまうんべし或時鼎俗称ふ玄鶴かぶりく醫療をあふうこに贅をあのもれて「お月面のうく花紙ぞ」

うあ一年宋ふ名ふうかりく「見るるゆと新るあや松陰れむの家流茅のかりくなる児清屋紙ぶ〜ふ恵の家かり〜小里れ遊如る家と投うも其居はぶけふ帰宅の於紙先ひるるにうびく

むひひを寄んとのいぶもまひく〜ふ〜祝ふの翁〜

歎くあく寄〜紙舟仕ちそむひの老く世翁と生と清て

一句とそくうう「梅ゆあるうふ乗ぐ〜出がれ梅あれ児清屋

の息俳名号舌兵庫屋拾女紅梅あれて彼ふ名者あれ一句年

仏と翻へ〜舌弟がうひいやこけるとそ又分荘と寒鍵寺と名く

或日合歓老人沾洗ふ〜来うく「こ〜ぐ〜やかけ沈く乎屋乃和

本姫と治洲ふ雲風紫翁も生ふ長無かう〜とふ紙舟表示

つゆかいつくく百年以前の句今時の調とはいひがたし今れ調ひぞ百年の後か合ひやと見時世の変革を知れつべし

西鶴妻

西鶴ハ江戸浅草寺このに住住人おもく文婦ともに俳社をしたり成侯いくく書ものしか西鶴はのるこの俳道ふか調市を住しく出ゆえとし妻ちくやもて出ぎのう「我子ちし住るを風し侯の書と風孫に西鶴その出るえんぐくおのれ一人ゆきしとく見ふ似くるる夏こそのれ冠雲云の「寄れ日やあれも人乃子捨ものひと侯伯すくく世郷はるも示寄ちしびや

皐月平砂

皐月平砂ハ江戸の人貞佐ぐつるく其比の粉識おくく人その乃前棘をとふふおくくびくいるのあ〜頗る和漢の出平海海油風雷戯板天地第一番戯場堯舜且文武未莽操中浄古今来許多脚色と氏大紀号をのぐれハ日本天竺の浄判海東西くくを考をとうけく「月雪や蘇の寝ハ釈迦如来ハくく左侍ふを種がるをとおりひくく「かくれとも世ようなる秋ちふ史記陳侯侍成傳くく「千金の壺ふとぐちるや花ハ去その作様ふ載るるも尽ふ侯ちと寄〜著ハ不の西耐集世る行ける續西耐集いまぐ新古ハ今の平砂が家ふ侍ふ

中村敦石

武州埼玉郡岩系村の里正中村吉兵ハ駿河の国式部少輔茂原一氏ハ世の孫こゆうくより風流の道ふ知紙ぶ〜しむ付ど矢連歌と好く時亨其河かとふ交り後俳社平如くく

宝暦六丙子年盂蘭盆會供　三十有六句

句盆供

宿桜くしてく亭棚をまつり仏をかざりなを結びて三界の亀を拝すると武

迎火の追焚すると

墨ぬりの墨の香ゆかしうめ

遊男　平砂

凡三十六句

なきがらの手へ栗ちりり枝

灯明　心切の釣燈照之清の月

供物　蔬菜の香

挽茶　甘きもの

水汲　人の手に

焼香　五種

盂中掛

霊棚乃蓮の葉の風や

兄の表

竹掛　四門を分れ

索麺の長まつ

馬　昊祭

飯茶　涌出の跡

供物　桃柿稿

摘草　

比也　霊表　南志　古末　石豆　灵里　結日　祭

棚経

灵棚　也　殿　那　留　麻　売　毛　乃　生　安　紙　松　木　桜

菖蒲之葉乃裏

毛間波

也箱位牌

燈

部類春屬

無縁方灵

送火

多女すく

旅の竹鈴の

むらの

僕喜八世よあ

昊祭

漂

おくりや一人八立く灯篭　拾

橘門百菴と友こう雅客を敎石といひ庵を南窗中にふ
「山笑ひ谷ちくくる金鈴うる」「太の肩をあゝに表のも
らちか」紙谷宮山出とのゝ人の校雙紙
色こいふひくせ江戸に出るのやゝ河竹庵と称す宮山上
客る清しく父兄のごとつ人接びはくいかく世人書物を
のくし来くゝ先生をうやまふ去の老文はるるゆ去れて
いうで居のてなくくむ宮山給くく人書物とりくくく
来るハ拙ま兄んがくめくくれハ我智の不足と稱ふ賢人なり
敎ハ兄んハのくべくくと つ人口を冷て是くをのくハ不絨物
或問金花石蒙集紙諸原道をどいまゞ世ふ行れざれハ
出るゆ　としひるか天ぬ八年七月初夏八辭世「愛ひ
や歳とせ冬緑

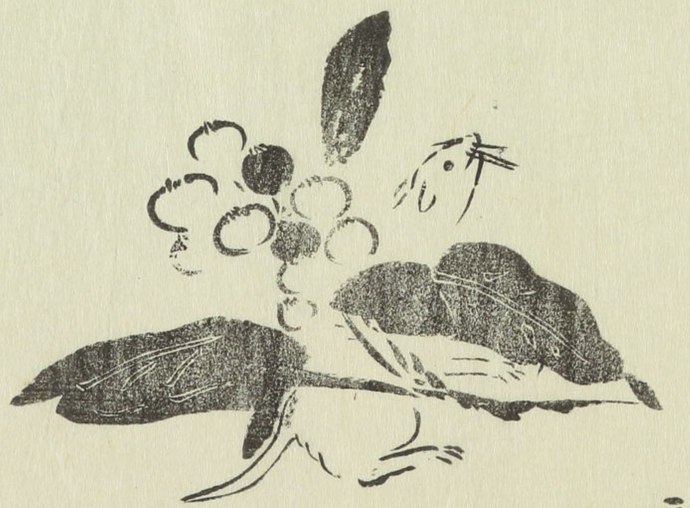
紙谷吾山

法橋宮山ハ武の紙谷の人冬うしく江戸ふ来り柳居子
たくくく俳ゆを学ぶ河死てくうく古調ふ行れ者を
て蕉風の旨とくくう冬と河弗とゆるも仆の変るとめる
ふくも其人ごくとりのべ一年れ巣且ふ出るゆれ強乃
あくもや初このひみ句拙いと優ま丈くくハは文選ふ天地
萬代之逆旅日月萬代之過客とゆるふたれを菊斗云より
飲中八仙の句くを色たくくるれ紙くくと智章を「敎壺
のれくくさもひや苦清ふ汝陽王を「日れ乃や涎もあつ紀車
うし左相を「千金の氷室や世ふ失て吉れ味宗之を「岩夫を我
拙ゞのはちひくる蘇黄代「妙法拂ふ蠅も行くく蚊蚊もさく
ひ夢白を「いくゞくに糸をまくせて帰く家張旭を「夕立や筆

をもてひしゝ雲れる色焦邊城「市中乃人をまどはす蜃の夢
始皇の御しゝ英流の國福時の罪とまゆるに何なるものの
ぞとせず人の為ぬふ俗世界をまるまし答ふさらば一極城
河しゝ通るべしといふ折うゝ時者の考ひば「我とてをゆる
さぬ罪やおもきぎ晩年俗世来業を葬し蕉翁の孫と解
しゝ先業の未熟とあうゝ又法方云物数称時あゝなるらふ答
八皆人れのてのそぶ西と世城辞ける吟「花とゆゝ雪八きのふ
ぞ本の形

五竹坊

五竹坊琴左八尾州の人俗名を庵元坊より俳諧風をりゝ
一時ふ唱る帰幸仙と号ゝ「田みおの所ふ奥ゆう鶴月「仰向く
分別八ゝ〻ふの月或時彼ふ沈まゆう我千猪をゆう彼ゞ



五竹坊

百所方八体し紙　細條にして
ものるものしこと深淵に寄るもしく淵
に保ちとなりて石角に点ありて有心
なるもの八十句を分類して
色々名付りて細條にしてしるし高野
信の何なりしかを我れしらず

法を我ふゆづり我が猪手を彼ふあつけば世八巳とうくえ
亦ばしくもゆくんと繰出しく「林檎ひ」ふ寄るハかしこ乃
巻程うる一年伺変るやるるんぬ沙の湯の動乱と驚るるこ
ども志を変せし巻実のきもえあるく百もあく沙つの沙
来を評するとのふるるん伺じよう附合のるり歴元湯同まるる
過去年附方八体のるるむき細條にゆ稜とのるるるら
を編ハるの句ふむふ時の所保にして杉くて百句より廿句なるで
る有心附るるき物八十句ハ金秋るるるるるるる稜く
名付るる細條にしかるるゆるるるハ射活の時なるるでハ筆紙な
るしかるるゆるるるもの

玄武坊

村上氏八医を業とするく江戸弱四石山下ふ住るり俳名るく

玄武坊と云ふ芝紙八尾元坊より縋尾朴斎ふ伝つて朴斎ふ伝へて此坊ふ来る「おちゞ来て後れば動く永うな」「門へ出て我家をそる事こうな」「日よりけふハのそと知らて雲の嶺」「滝」「その屋くまりて雲の姿」「牙をもてふ役ふ出る意サ」うれをのれ死せ〜と人の風雲ふ乗ると「死ぐ狂ふ坊うを見さ」「花の表堤ぐ死雲をとゝ来れる人をとゞめて「そぐよりも死意ハ永し手打ふ名つ子の利鑿をるに忠ふて玄鑿」三千の穂もあく黒衣之学の意れもちゝ武芸分ふ利ちゞらふと新出しく「缺盆骨ふてくやむ意の中その調寂孤ちく味ゆるも法の一流と様〜直〜孤新」ゆ迷ゞ〜ちられば世の変化流行ちんよう八新古不易の俳諧ふ拉んふ如ゝて「先ぐ〜の滅ハちゞ〜松の色あるし」

尾の大坊坊ちう又出ふ来罪きれハけちうき意元史の孤子「殺せちときく〜ふ意洞き紀あゝゞ今ハ絶念となれる三頭の一油ふむうひて「百合のそる我もうれむく永ハ〜つ人伝ゞ〜ハ留有ちく居ふ俳諧の資助と成し人と成意産業の為ちればちく狂ふ意ふ居ふ変の有ると嫌く文俳諧ハ鄙俗と云ども本忠孝のやうれを加くるやうに狂の意ふ居ふハ我居れ忠ふ加ゞと云人きく〜ゞ迷ゞ捨方ちく陣屋の嫁切ちう又ある法度俳諧の為ふ多ふ伝ちく〜ふ命〜ふ伝孫を出ぜ〜むつ人脱て沙ふうつたふ沙数ち我の〜孫ふ名ゞ〜番士となる時ハ伝ちを命ぜちるもいなゞ〜沒んや俳諧のやふ於てを今流の一流を後世ふ伝へんふハ牙を宗ちく意と後去ハ

ものとをうけせばうしも尚時ふるいくの大導ゆうをと嘆
きぬるものもあるらし

蛇門曉蓋

曉蓋ハ尾州公の藩士くはしめ俗称を英流の俗業みるる
びしもやく蓋ハの蓋と感ぜしくに一風を記ぜ拙うく蓋の本の
号を拙せんと思ひ立しが勤の暇うこなうて君の動作と影
源人しをうの稽なく古蓋あるくに見れ住居を神戸の史より
名古屋の町ふ移りく蓋面巷と号し周率も認つも
称せり「振袖の大和ハ去るし日の初め「猫やれて有うけ学
の四月ハ「年の春末の柳や花木董「曉や緑の初の霞
の清志ふ蓋人を以るに伊戸を稽しく宵九清地ふ移ふ蓋
暦中うちのくふ稽しく松蓋を一見して「清要殿の原蓋し

千松蓋とせしが甚深いまゞ健城ふ入しとを地の秘密を
見合るも始和中ふくび行く「松蓋や果ハうるく夕ぐめ
と伝公方紀一深ふ初め稽しくも寅に感吟しうとなん
行れのうしあや松くを見やしが不遂殿やふ呂れ参殿ほうふ
やうく「あ寺伝ふ星の古糸て たくふ名やうくこ松
ふきくふ自ら伝を以る数句「春郷ふ山路の公をなれる春
「蓋と蓋ふ古ろや庵の古蓋まで「頓稽の太ふうれる拝叩

○谷口蕪村

谷口蕪村ハ別姓與謝名ハ長庚字ハ春星ニ果東成と号ハ常
に和漢の古ふ既く稗史ふ説まで海ら伝とふ支本しを人
と称り蕪蕪すく物ふ物ら伝時て戈学伎義をりて公業ふ
交るとゆくも礼法を正ひるとをくく已が産業ハ漁猟を変

とりて水岸に家居し妻子をやしなふに残月の時は出て網
うちかづきし鱠ひ去て朝の市にひさぎて帰路酒を買ひてかへし
みづから詠吟していふ「三椀の雛黄がなかでや長者振風姿卓然
「春の海ひねもすのたりのたりかな悠々無涯「花を踏て帰るさ
照しも捻子洒落自在「鉾楠をおれかと樹下に奈凡ヶ窪生
清涼「まかり来ぶ富士の裾野の小家より譬喩無比「ころもがへ
高きを漱ぎむ寺げやし販西上人更得其趣「緑葉市に
刀をさしたる「年守や乾鮭の太刀鞘の拝共意氣揚々偏翁
其歳々人自悦に好む所の滑稽その楽地をうる千載の下のちも其
人なしといふべし又画においては謝寅といふ初め漢画より入りて後に一風
を起し世の人の知る所その好ひくすに当時大雅堂と伯仲すべし
や平安の淇園先生題謝蕪村江村之図の詩はのこりて趣を写し
これら述ぶる所ある者は求めえてその人の生来を知るべし

闌更居士

闌更居士は医を業として京都に住れり姓を加賀の産因て
俳をむびて折から俳席をも立けるに時に当て蕪村暁台が
どれ名家まけかされをもって年月とおくる或とし加賀の何
某きたりて今蕪暁の両旗にて近世に俳諧の棟梁
なし汝居然としてその時のはやれるを知るしげやと有りに葉籠或
庭下に投出しより案文大ひに驚きて金銭俳名にふるひむけける
より都に隠れなき紀家法とは成りけるし「ひとつげや燻りれ中ゑり
梅の花「日の影をおもくて拾むる出扇が「枯尾しの日かし
よれて流逝りてむかしせ東国行脚の途中信濃の国まへの駅なる
残夜修来首良が許に旅宿れ折から咄すかもて持参しし古

書画をあつむる中に蕉翁自筆の奥の細道あり是より諸國
の門人多かる中に加賀の北枝が句あるをいふかこの人の居ねむるを筆ひ
に旅硯の筆とりて小枝が句をぞ出載せける翌朝ちらく後
あるじの見附て大ひにおどろき其よりむ先重てみだりに人に
見せ侍らざりし

渡邊岱青

渡辺源右衛門ハ尾陽の藩士にして代々職禄の家にありしも
常に乱舞を好み装束等に金銀いやしく費し挑りと
貧に居て晏如たるハ彼楊雄が操をまもれるなるべし俳諧を
暁台が門に入て老年を送れり「櫻ちりて花の盛ハ山のあ
りけり「時鳥又鳴までの秋ハ長し「宗祇忌や逢坂の杉に隠れ
なき「木枯のあたらしく地に鳴うもれぬ俳道を役するに満青
を抱ける代なくして己が庭中の土蔵を売る府生丈夫六人来て
て泥古をなさしめ出たる時に俳容あまりさ席に漂くる其をたなうれし
手迷に出て今日の俳諧の風情も追し庭前に晩けくて
客人の興に供へねと誠しやかに改めたる其後俳林の点
しく宗物を出さむとしたるに抱すも不図おもひ出て己が親より
り持傳ふる元山ぜらつと出し点傳しける人せんかたなく受
取しも棄く此物へ不遠して売んとすれば實るなく
與へんとするに業ふ老なしとみて物ましらるぞいとあはれなき

井上士朗

井上専庵俳名士朗尾州名古屋新町に住せり素より物に拘ら
ざれども篤実なるハ其性なり幼より医術を励みて数年
勢ひをはなり毎に観て一人す調合にて是を己ハ別席に出て

りのこれ病人と扱ふ扱うち法華の強客つくひ来るく挑燈やむ
時なきも其機とうしあるの日あしとうや人の及ばざるを示ふう
和こせ和のふ庭ふ蕾れ来りうと庭掃のそのこの若るふ
「英雄紙りこ仕る梅ふ垣ゆうく伊勢の年居宝玉の毛乃
漂朴なるとめでく文世の注来うえんぐるも或しれ泉生に来り
抜びくを法ごりうふ砥うるを「松坂のまつうを表乃こ
まりうれ花よ年家ううく塵ふ崇ことせしみや「琵琶」うて
去ぐしむと月の雲大和の国ふ彩御寺次敢火山ハいづる耳梨
山ちどれぞと彩ゆりく泡のあるうに雑丈れ立るを咲うけ
そのうしく初まうにむのうりくの二えとこ〳〵色けど少こがむる
乳色もなうれば「世人も耳ふしゆ蕊紫撥花月一雙の粉び
ふうれ日も既ていうれて多もけや一瓢の酒の残りびくなく
飯ればと茶出しうく「瓢箪ぐ結あうく多くれ抜年生鈴伐
抜うりこうく人年自賛の句「南蛮月夜南蛮時雨蛮神巾と行道
の年まや病に邪しく「呉る素を初迷や田塘の流俳居られ
終涌と飯ううう初失盛青が同像を清しく紅葉乃宴城
りうれとと寿たぐちふ抜くうふ席上庭ドふうびくきれ紅
蕊をちして呉ふ神を名けるが抜ううあるぐ容ふむうひくく句
なくんバ乃る事なかれ世朝はとの入く答くく「一字ツ愛句
出だや薮りうちつ人蕉面ふ八巣の号を稽る文ふ霍の松巣ひ
蕾の梅よ巣ふをうふ一月の雲くふ宮の夜ふ巣ふ日も若よ月雅
を産しなふ附ぞうよ連や時の浮巣によせくる花ハみかこの巣の
力巣ようを粗句れ巣守を垂ばりぬうくその云紫海くと無ようう

乃上不白

川上不白本姓ハ荻原なりし先祖より紀の新宮侯に仕へたり
已十六歳の春より京師に趣き千ノ如心斎に就て茶事をまな
ぶ宗雪と初名し日夜の琢磨にその名れ縕奥をとしく(?)
成就し帰途ハ千家の風体弘ん者ハ海内にわたりしバ有べきのみとて(?)
いでや身を立名を揚んとて旅立るを除く師の一秋風にのり
て帰るや東人と饒せんとするに出て江戸に帰来し無雪蓮花の
二菴といふなりてより専ら茶法今に至るまで流行ある是その僧が
功丈によりて悦りといへり不蔵菴不白といへるも陸羽居士が唐歌よ
り取て來れるぞ又古をまなぶの風流なる哉ハ孤峰宗守斎
因好斎などの號あり時の帝[illegible]白殿日光准后宮にも召
されて茶事を召させられしぞ名誉なるかな其後の大徳識大円
第輝宗学能門第役大鎮等と友としよしき者菓山乃

湛江和尚ハ本法寺の日詮上人なとど出入宗哲漆家正玄利休
が塗物ハいつも更く又俳諧を好みて名ありし頃ハ治湖にとより中比
建斑のまるび老く蓼太とまじはるなれ茶事をたしなむれ餘
力え在る一亭宗雪を嗣子として「漾茶の末葉かや
世よ千代の名田く菴　宗室　茶湯詩会を主りし時冴かへりて君乃
淡出しなると「淡雪れかるも茶湯の花香かな　振く亭　蓼太　か
そびくりしが蕾の頬ハすぐ蒼く居くりし花の初き日のけぞ
うかるりしいつしか咲いでゆしとあるなれ「とく咲と君やいひけ
ん夕桜と称えるといでや糸桜乃んと眠る茶蓼の二子とさぞ
ひ又その宿に夜迎して「雲霧と流るや流くるの山のゝ秋くぞ
まなるふ時ねむりなるに湛松寺　湛堂和尚　の室にいくるに菊乃花
いろく加に織なく古く祖居士　利休　葬の茶湯かりしが

それハ唯一箇の天下れるもの也と云うまれハ百花の梁林の窟城
人いぶかりて問ふ「何ぞ」「牧丹ハ花王ハ花の宰相牡丹家
匠出生の牧千葉の産ん業ふ業ふ業れ中に生じ「秀麗や
雪の牧のとを去るつ清泊なる口調も乃を以て遠なる徒

寺町百菴

寺町之和ハ沼戸れ人新柳宗〻婦〻「百菴ともいう「心意庭
を山ちの〻ねもかう「小南の侍屋安窓れ梅「十の秋に出〻
月うを十三夜白氏文集を聽我歌兩道富家女易嫁嫁早輕其夫
貧家女難嫁嫁晩孝於姑と沼を引く「和意ふうぐ〻乃や雪女
徂徠先生　大樹公〻五月九の時紹かし〻く「雪中の枝るを乃を初る
いひ教その孫屋ハ佛〻うと也〻も侍こ一家の風姿ハ壮業宦
遠ハ出〻〻ハ放浪道流翁と交り牧〻和ふと嗜ゆう寛保

元年の冬病ひ〻ハ出〻〻ハ放〻〻翌る春〻
時ハ牧と牧〻十八年家迷俳ハ乃を上げるゆ出ハ林教俳
淡ハ自紀ハ宝暦六年賈閑の牧と牧〻〻〻「狐沈〻〻
〻ふ夜衣〻〻紀牧の捨きぐ〻〻ふ捨れ〻〻ハ戒ハ屋乃を法
〻も狂歌ハ金体居俳〻ゆるの癖あ〻〻實頻の山伏井戸〻
ハ〻〻も石鹿の接樹ハ隣〻〻を物ふ〻〻芸ハ山〻州尾
と揉〻る時君子楽山と云る〻〻を「俳ゆを結ハ〻〻〻結
乳山人〻〻ハ〻ハ郭公ハ〻〻〻ハ門ハ居を結せ〻〻〻
「〻〻〻〻け和けハ義の所の門ハ〻の俳ハ〻或時ハ法橋吾山
ゲ家町の庵ハ小屋れ拙女と引連〻〻芸ハ食客〻〻ハ已ゲ俳
耶も家〻れ〻〻〻ハ〻〻ハ一家〻ハ数度の宅ぐ〻も〻〻
夜ハ百菴の号を〻〻〻蓋て稗世〻〻「出ハ〻〻ハ拙き屋の〻

しも筆ぶくべ後の行方もしらぬ

馬場存義

馬場存義は甲州武田家の末裔なり徳川氏流なるの末孫なれども家あり
りく三浦郡に住くらかのれ数代しく妹聟に跡をゆるね遂ま
隠遁の身となる時は年甲春家春来小名陸奥しく春宣とのい
しも河の者成と改名をしようものれも存義と名れり初めの
号雪井菴より古来菴と名るゞ紀うるの古らのこふ古来れ
号を懐ひあげくよう有安尾こふよべり「為帽子きて乗馬
はくやは松曳」「紫ゞれの月の日の月や梅のもち」「けさ秋と初ら
で庭ちく男うる」「白布ゑ布みの濡れ紅れふとんうなゆのひ
うや萱場町ふ住ゑる時は松乗りしく家ゆゞくなれば面ふる
おくふ筆さして俳諧ふうれと家道の疾面して八景のも

しうるうこ以遂しも屋く年こらく左門町ふ居住物
しくる後は俳る富ゑ老と屋しなくりとうやはゞ先士こ
りし時ゆゑ儒成南郭先生に学びしを主人の上ふ立人こて
あこはるると変ゆしく俳客こふ俳ゑくこ成ゆしくせ成法儒く
ゆれくこよりうた先河南郭先生の東ういゆふ遇て示来
摩学の羅を流こるふ先生莞ゆく英ひく海こ紀る我儒成
ゆく俳神るゆ〳〵は老こ海儒をゆゞくも程ゑ来ゑく清る
ゆゆこゞ況んや顔回ゑ貧ふかいこくを海詩まゆゞ心を
京坡山谷ゑ載るゆゆ雪白を織ゑは程ゑよゞし又我和の
和ゑと学ぶこを宮家家隆の右ゑ出こかくべし修人九赤
人の聖ゑこをや俳神は中古守武宗祇ふ才して貞徳芭蕉ま
祝る汝上達の和ゆこるゞ何ぞそこもうこに祝ゞんやと笑ふ紀

豊田西　不見子

坊隆

義剛と存義を教ゆ百年絶しく忘れ去りし丈より乃ち丹波桂抽ぐ俳の可境より入しと多し

春秋菴白雄

白雄は江戸馬喰町の通菴に住る場の者ゆ俳りの仁信州松代の藩より出て人と少深く性氏を匿して偶たゞ同人多くいつゝ之者ゞ微英しく更かゝるなりしとゞ初め松窓尾鳥明の門かへて手伝ふ春秋庵晩鳥と云ふ鳥明の俳諧の一統を受て已が名を適ざりしかも一とも忍ふ志と翻しく家ふ雖伏せ幸れいてづくなると悔く松窓庵と号し一家を立るふ冬の日集の言調と云ふく吉と支を後と宮め先名を白雄とあらむ或ハ志ふ旅妨も称せう尤も韵卓劣く迷ハ会孔笛の附録ふ氏の尤哲と誉ふく称せる因ふ白雄ハ國を威せふ兵革と倚ふ人を和する為玄流ふしく洗練あられるゝ共も之つふ洗多の英士を出せるゝ世ふ知る所ふなれど流ち人和多しもいふ爲ゝむ又家剛ふ窮栞と宮ふ一書ゆ少より蕉門の瑜ゝ自已の一見識を出加ふく之を志と見ゝ之ふ見る扨之尤洗書のゆハ被見雅被ふかゝへる人もゆゝしいとも見雅の褒貶ハ姑く留くべし信ゝ

の貞流の選なる洗傘を之く松下ゆ数百ケ条の異見を徳く雅洗傘を為ハ之り扨ふ之ゝ雅ゝ清潔なる一技を天明の比むゝ望に甘谷と云ふ人ゆ雪中庵の門人ゆゝ加ゝ妙之なゝ好める人ゝしゝ白雅坊も彩く止宿しく郎雅と加ゝふ幸ふと親しく加ゝしゝ之んある事の交甘谷宮ふ遣留の日越後の縮ゆ人来ゝて之流くの彩織ふと云ふ人ゝ探ゝのふ之中に宮坊の因にも出ゝうしく物ゆゝ宮ゝ之れど甘谷之宮を織て見ゝ

世を防ぎ給ふすべしとてやがて裁断ふ若ふ命じ給ふ仕立上るより
客坊歓びもてなすこと限なく打寄りて試
るに上に従ふまつ風雅の嗜みもなきたりの迷いて切ふ者の様
の表秋と若しねをかりへ我とても亦翌の日を経ずして宮の人
の厚志とりて我が世もまつる一衣すべあれば出さしかんて
我心と感ずるいとぐる風雅の日ともいんやとて称ずるが出ふ者ずて
更ふ従垂りなかし甘谷も庸人なるに孫だいうふも我あやまちて
世ぐ生一衣出せらるをみて海員出て生を宮ふ住を定るとこ
又家家一緒の狩もなくて新尾の懐礫るの屋に門人二三ふん
と合せてこと勇と助んとて三国の美食を猶ふを後日も遍くて
若湯と垂ふる設まして例の人来りて嫌排ふ如かくの相より
たること誘る物を立てみるふ先ふ猶迷ることなく思ふ者ふ

しと呼ぶとふ坊ず白を一品のうし秋他へ出ずみてしば
懐ふせんも黒ましを修垂んも盗人のおそれるとく人の乞付ま
じき泄棚ふかくして出ずうしを先ず拝び四方へ
帰れ隠しを垂るを忘果て亦も出さしりまるふ再び湯を
沸るうかしてを飲ぐれ人も扑て大きた笑へるとぞを酒蔵
かくの如し寛政三辛亥歳九月十三日没年八十三品川海昊寺
ふ墓を垂吟を拾ふ者ふ門すて「関の戸やあのき彼迷し
あきの風実蜜墓を拝ずのとうとふ亦ふを「去のきこの
沼をしとも白髪首七星ずをまふて「半の脇ふ酒ありか
ざく花も桃孤高の人猟月二十七日江戸を立るの我を亡この去
ちて「刃」とも又あふすもうる海人その風彼亦一を有るりの
ふをかりする

大魯蓼太

大魯陽喬俗名八蓼太と云空靡居士と称し雪中菴三世の宗匠なり爰に二世更巴沙の俳諧を翻てより昔も亦韵をくぐさしめもとより後生を南州より八門人数多ありて老よ杖を曳八牽に寄縁ありて原の白張祥沙の詹尾下に丹田を探る事多年積て遂に宝暦己卯の冬免許とゝもふを書かり日大島雪中破却両重関所謂隻手與音聲也云云又安永乙未歳陽門人蓼太の俳句を集て来船の清人に示し宋澤士に抱て それを続さゝ〳〵大に信ずに非とゝ多書しゝ一帙を稽る事一章に曰

撒蜜他列耶阿兒要披促嘩尼麼子那次吉　蓼太

蓼太先生者隱君子也都人士以爲金馬侍從之流亞矣　中略

蓋僕亦有所感也因賦一絶寫其意倣顰之誚所不辞也

長夏草堂寂。連宵聽雨眠。何時懸月色。松影落庭前。

乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程斂南□□

又安永丁酉夏蓼太句集を予刻せ序の俳去南歌子曰東都蓼太以善俳諧歌聞于世中略有是哉昔者晁卿與唐人酬和明人著日本風土記載和歌數篇然則彼知我有詩有和歌矣蓋未知有連歌也而況俳諧歌乎知有俳諧歌者乃自蓼太始云云

思ふ人ふ清人の和韵ふあつるの八流ふ風雅のめいわくとそ考へ侍る又南歌子の言のわく俗談ふ侍るの八是よりして彼ふと國人も去るとすると云八一家の名譽俗ふ世上あるべきや扱まことありし昔の芭蕉庵の跡といふ八今八俗ふ侯の邸内ふ移されし時その四季のあらを慕ふ人をとい〻ども尋く除えるの多ふかりく

かゝよそぢ寛ふ拾ゝ明和八辛卯歳田茅の地を去ること一二町だゝ
りかゝゝ蓼太の善提所要津禅寺の地中ふ古池のかゝら残
うつゝ小堂ふ入祖翁の木像を安置ゝ傍ふ一茅庵を結ひゝ
乃芭蕉庵と呼ふ又日浄刹の内ふかゝつきを営ゝ蕉翁の像を瘞
て俳塚と唱ふ抑此要津法窟八独昔俳頂禅寺且懸杖の因ゝ
ゝゝ事を志のぶる接なきこゝあらゝれたゝかゝて没元孫の世の
うゝだうも今深川の地ふのこれるこゝ実ゝ古ゝを懐ふ俳を
学ふ道を学ふ生涯ゝと誓ふの使とゝるのいさゝ年でう翁
者の門翁のおよぶ所なるべきや蓼太生涯の編集六十餘部幸
翁ふよゝゝ生ゝの八者ゝ又世ふ名る所の日時吟俳あふ所ゝ
二三を拾ふゝ化の例ふならふのゝ「ふるやや義ゝき花のよし
の山」「迷ゝて八月よかゝゝあるふ「名月やゝゝれかゝらハ
翁の私「ゝゝ尖と見迷ゝて風ゝよるの雲自像ふ敬し
て「ゝゝゝ」ひの八迷ゝのゝ」ゝゝたゝふゝ庵天明七丁未之
月七日歳年七十要津禅寺俳塚の傍ふ墓碑碑銘あり

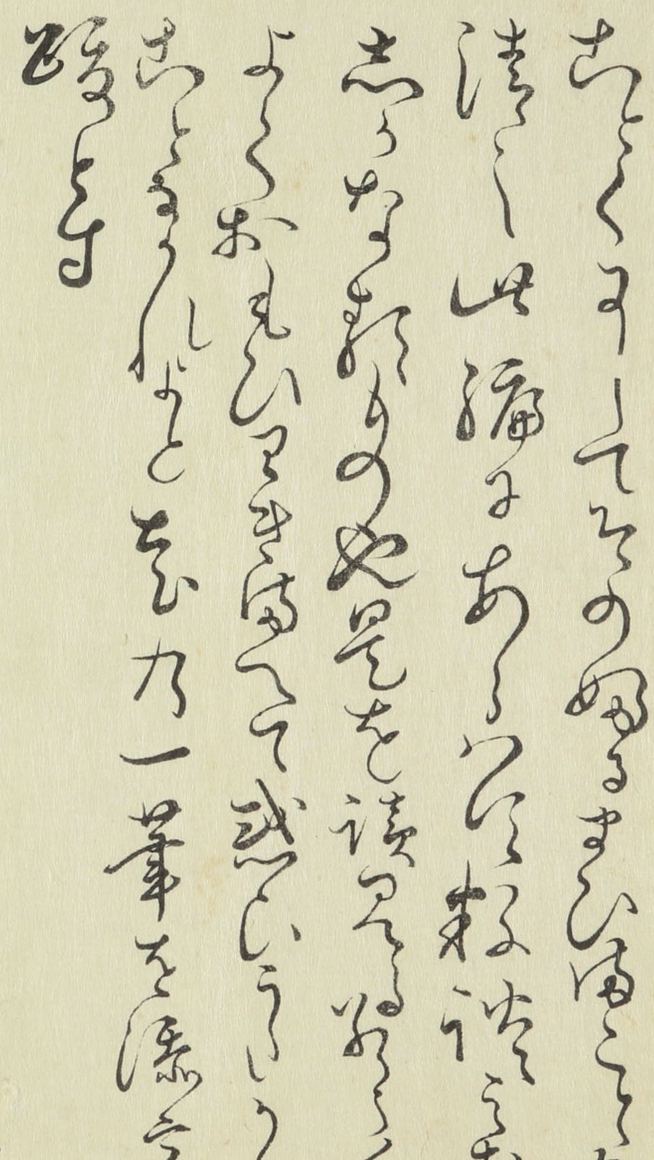
續俳家奇人談巻下　終

今の世なる人々俳諧と号するものを侮し品あるを望へも
無とみたる歌の者しにはきて大うるしをもつて一箱ちらへし
うち中に何の義忠を面ちよみ元ちもれらるかしあり
ちみしかをしまれ宴ちを元ちを正風とせんも
いとはかり歌を志ちしくをいかいの名をかりあひ俗く
ちしらひ行ちるものうち名聞れ人のかほ当ちもあれ
志ちをたるもおしに志ちはあまて四時ちをもれくるを元ち
古ちの変行ちて自然忠ちは俗ちをいへるを
きてうちをしに志ちを変ちにかくうんちをあみち
ちたく家歌忠ちを行を稀しに行ちの奇ちを変ちを撰ちを

はに境をかくし気兄かくしてす風流もあらねがたしと
もれたるもろ家の道にとどまりて俳ふるのおさなく帰らく
はれさの漂ふよしれあれ筆しつ迥ひ出すうるはしく
みちやすき気まくさしれさらありかもて八たしかき事
はくちをわが更付といふも芸も書林のもとで集めす
れくとをおわくを記もの志も何るたくちさかなのみれちを
まてし　あきつおの　時に天保三年なし　壬辰やよひなる
あはれ秋なれは出よて白兎堂忠良任

俳家奇人談跋

抑て世風流にふく人心譲らかに
言ふぬるままにてさとをあやまちて又
あやかり道わりて惑き者とてさ流
ほまるるもあとれて世中間り
推逸す世にかくさうもさうしも情実の
おほのさをかるれのほりなかがらつき
奇といふべきまきかれめるの



天保十三年
壬寅孟春

全志發行書林

大坂
心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
心齋橋博勞町 河内屋茂兵衛

江戸
小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛藏版